

# 2015年の時計塔

よくある話ではあるが、その年の冬、ひとりの魔術師が死体で発見された。

彼は小規模ながら研究棟を治める館長であり、死体の発見現場はその研究棟の館長室だった。死因は胴体を切断された事によるショック死とされている。

状況は第三者による殺害を示していたが、事件当日からさかのぼって一週間、現場である研究棟を訪れた者はひとりもおらず、容疑者不在のまま彼の死は自殺として処理された。

不可解な事件だが、魔術師である以上このような結末もある。

自殺のような他殺も、他殺のような自殺も、彼等の界限では日常茶飯事だ。

なので葬列に参加した者たちはこの事件に何ら疑問を抱かなかったが、いざ故人を埋葬する段になって一斉に首をかしげた。

生前から故人が用意していたという墓標には、おかしな事に三人分の墓碑が刻まれていたからだ。

## 01 夏 ロンドン 郊外 時計塔 十一番街にて

強い午後の陽差しに目を細めながら古い街並を歩く。

イギリスの気候は日本に比べて乾いている。湿気が少ないので陽差しが強くとも不快ではなく、汗もかかない。

私は羽織っていた上着を脱いで、地図を片手に目的地に向かっていた。

レンガと石造りのストリート。

十二世紀頃に作られた建物がいまだに残る、中世と近代が入り交じった風景。

四十を超える学生寮カレッジと百を超える学術棟と、そこに住む人々をうるおす商業で成り立つ街。魔術協会発祥の地であり、名実ともに現代魔術世界の中心部である魔術師の総本山。

敬意と畏れをこめて“時計塔”と呼ばれるこの街に、私は何年かぶりに足を運んでいた。

「ここからロクスロートと……さっすが最弱の十一科、街並に嫌みがないわね。お金にならない考古学者の集まりっばい」

時計塔という都市はそれぞれの学部、部門ごとに街の造りが変わっている。

魔術協会は神秘学を十二の分野に分けており、都市の在り方はそれぞれの学部の特色を色濃く反映している、という訳だ。

十二の君主ロードが管理する十二の学部。

十二の分野は必須とも言える全体基礎……魔術全体VIの共通常識、地脈III、マナ学……をIとして、それぞれ、個体基礎、降霊、鉱石、動物、伝承、植物、天体、創造、呪詛、考古学、現代魔術論と続く、魔術師の在り方を決める研究方針だ。

十三個目の項目として政治家を志す者たちの法政があるが、これは神秘を探求する学問で

はなく社会を回すための学問なので十二学部にはカウントされない。

たいていの魔術師は全体基礎……魔術全体の共通常識、類感魔術と感染魔術、地脈、マナ学……を五年ほど学び、その後にかごに受け継いだ学部に入り、その補佐、発展のための予備として他の学部にも籍を置くのが常道だ。

学部で言うのなら私は天体だった。

一言で天体と言っても占星術、天体運営、神学等に枝分かれするので、自分とまったく同じ修得課程の魔術師と出会う事は稀らしい。

また、学部寮街ごとの結束は強固なもので、余所者が自分たちの庭に入ろうものなら個人間の争いからカレッジ間の戦いになる事もしばしばだ。

もつとも私は時計塔に在籍した時間がないので、そんな縄張り意識にはほとんど縁がない。このように自由気ままにロクスロートカレッジを闊歩している。

これがメジャーどころ……選民思想の権化じみたバルトメロイ家が牛耳る个体基礎……のカレッジであれば私設憲兵に囲まれるところだけど、このロクスロートは魔術協会の権力闘争からは外れた区画なのでその危険はない。

なにしろ考古学しかやらない、純粹な研究者たちの集まりだ。いまさら私を捕まえてあれこれケンカを売ってくる人種はいない。

「おっと、ここだここだ。ミスター・フラウロスの研究棟。

あらま、予想より大きい。よっぽど羽振りのいいパトロンつかまえたのね、彼」

目的地に到着し、鉄柵の向こう、豊かな庭園の中にそびえたつ建物を観察する。

こじんまりとした一軒家を想像していたが、実際は敷地にして二百坪ほどの大きな屋敷だった。日本人、かつ庶民出の私から見たらちよつとした城のようなものである。

「共同研究者もいるんだろうけど、ここまでの工房を構えられたら大成功なのに。

なんだって、あんな——」

口にしかけた不吉な言霊ことだまを押し止める。

門には「来客は月末までお断り」の立て札。

屋敷は高い鉄柵で囲まれている。

私は咳払いと共に眼鏡をかけ直して、レディらしく優雅に呼び鈴のベルを押した。

## 02 レフ・ウヴァルの記録

——魔術師の一生とは、過去に奉仕する事だ。

昼下がりの研究室。

山のような計測器具と山のような記録用紙の中で、レフ・ウヴァルは今日も今日とて一秒も休まず、過去の記録を紐解いていた。

レフはこの屋敷に籍を置く研究者だ。

男性。ドイツ国籍。アリア系。ひよろりと高い背を猫のように丸め、散らかった室内をさも狭そうにせわしなく歩き回っている。

今でこそ研究の虫、館から一步も出ないチェアーマンと揶揄される彼だが、かつては二十歳で魔術四階梯の祭位に到達した神童として脚光を浴びる事もあったという。

しかし祭位を得てから以後二十年、レフは自ら十一科に籠もり、以後は粛々と自らの責務を果たしてきた。

『館長、今朝も区画長からのお誘いです。相談事があるのでぜひ顔を出してほしい、と。いかがいたしましょう』

研究室に取り付けられたスピーカーから、瑞々しい女性の声がか響く。

声はレフの秘書兼世話役のものだ。レフは神経質に頭を搔いて、律儀にスピーカーに振り返って声を上げた。

「いかがもなにもノータイムだよノーリッジ君！ 外からの用事なんてことごとく断ってくれ。ボクにそんな暇はない。プライベートに使える時間はその月の最終日、夕方から就寝までの

四時間だけだって何度言ったらわかってくれるんだい!？」

『はあ。ですが、今回は学園長もおいでになれるという、たいへん名誉な』

「知るか、君のまじいパイでも振る舞って追い返してくれ! だいたい学園長なんて入学式にも顔をださない都市伝説じゃないか! ボクはね、極まった放任主義が気に入ったから時計塔に残ったんだ! なのに年々どうでもいい人付き合いが増えていくなんで、それこそ話が違うじゃないか!」

『同感ですが、人生とはそういうものだところろご理解いただければ』

「それはまっとうな人間の話だろう! 世間からつまはじきにされているボクが、なんだって世間と折り合わなくちゃいけないんだ! いいから断ってくれ、そして極力ボクに干渉しないでくれ! せめて今日一日、あと十時間程度は絶対にな!」

『かしこまりました。区画長にはそのようにお伝えします』

スピーカーからの声が途切れる。

レフは溜息をつきながら魔道書の記述を解読する。神経質な事に、先ほどの会話中もその目は止まっていなかった。

「ああ、魔術師の一生は短い。なんだってボクは脳味噌だけで生まれてこなかったんだ」

このように、レフは徹底した研究魔術師だ。

己が理論、己が魔術式だけに心血を注いでいる。

それ以外の責務……魔術を実践し、家柄と血筋を築き、支配階級として勢力を増やしていく魔術師を毛嫌いしている。

レフからすれば彼等は“普通の人間”と大差のない俗物だ。

神秘を解き明かすというのなら、そこに人間性を求めてはならない。

魔術師とは魔術を考えるだけの生き物であり、そこに“人生”などという重荷を背負う余裕はないのである。

たとえば、いま彼が解読している魔術書。

魔術師にとって過去の魔術書の解読とはただ読み解くだけのものではない。その年代にのみ通用した神秘がこの時代でも再現できるよう意味を再定義する事である。

過去にのみ成立した流行を、現代にも通用する流行にリライトするようなものだ。

この本の一頁を解読するのに一時間を使うとする。五百頁あまりの本に費やす日数は二十余日だ。研究棟にある、いまだ解読されていない書物は残り五百冊。平均的に考えれば一年で十二冊。五百冊を解読する頃には四年から五年の月日が経過している。

いや、それだけならまだいい。一冊だけの解読なら話はもっと簡単だ。

だがレフ・ウヴァルの責務は“ある魔術書の解読”ではなく、“ある大系の解読”だった。事はすべて連続し、有機的に繋がった現象として捉えなければならぬ。



魔術書Aと魔術書Bの中で、ある事柄において異なる見解が見られたのなら再びAの内容を検討しなくてはならない。

解説する本が多くなればなるほど再定義にかかる時間は増していく。それこそ天文学的數字に。

無論、レフの頭を悩ませているのは“解説にかかる時間が膨大すぎて目眩がする”からではない。

“すべての解説までかかる時間が正確に測れているからこそ、自分の残り時間のなさに吐き気がする”のだ。

「短い。短すぎる。とてもボク一人の寿命じゃ足りない！」

魔術には老化の遅延や一時的な若返りもある。

が、それもせいぜい百年が平均限度だ。魔術師として寿命には逆らえない。

なので彼等は子孫に望みを託す。魔術師たちが代を重ねるのは、ひとえに“自分では為し得なかった宿願”を引き継がせるためなのだ。

魔術世界の一般論として、ひとりの魔術師が自分の研究に没頭できるのは五十年までと言われており、その後の人生は後継者……“次のランナー”を育てるために使われる。

「いやだ。いやだ、いやだいやだ！ そんな暇はない、そんな才能はない、そんな甲斐性ある

ワケない！　そもそもボクの子孫なんか信じられるか！　ボクの責務は、ボクでなければ果たせない……！！」

だからこそレフは時間を無駄にしない。

自分の寿命では絶対に間に合わないかと理解していながら、こうして身を粉にして研究に没頭している。第三者には悲壮な決意に映るだろう。不可能と悟りながら、無意味だと理解しながら希望にすがりつく愚か者と。

“ああ、せめて自分がもう一人いれば、ボクだって少しぐらひは人間らしい生活ができるのに！”

いつしかそれがレフの口癖になっていた。しかし、

“……それは違うと思うけど。貴方が後を託さないのは子孫を信頼できないからじゃなくて、単にソレが楽しいから、自分だけで独り占めしたいんでしょ？”

「——む」

かつて、レフの口癖にそう切り返した友人がいた。

休みなく走っていたレフの視線がわずかに緩む。

そういえば自分に学生らしい時間があつたとしたら、それは彼女と昼食を共にした時だけ

だったな、と。

『お忙しいところ失礼します館長。今よろしいでしょうか？』

「な、なんだい！？ 忙しいよ、ボクはいつも忙しい！ 今だってちっとも気を抜いていなかったからね！」

『はあ。では、館長によく分からないお客様が訊ねてきていますが、やはりお帰りいただくのですね』

「もちろんだ。そもそもよく分からないとは何だ。学園長でさえ帰らせるボクが、アポイントメントもない、どこの馬の骨とも知れない客に時間を使うとでも？」

『念のために確認をさせていただいただけです。ではいつものように——』

「ああ、ちょっと待って。こっちも念のために訊いておく。アポなしなんて野蛮なマネをしたのはどこのどいつだ？ 名前は？」

『はあ。ミス・アオザキと名乗っていますが、聞いた事ありませんしどこぞの馬の骨でしょう。さっそくたたき出します』

「——よし待ってくれ、今すぐ行く！ ロビー、いや、館長室に通してあげて！ すぐに着替えて駆けつけるから！ いいかい、もてなしは丁重に、いい紅茶もひとつ頼む！ ああ、でも君のパイだけは出さないでくれよ！」

レフは慌ただしく隣室に駆けこむと、ここ数年袖を通さなかった背広スーツを羽織り、ボサボサの髪をブラシで整え、大きく深呼吸をして廊下に出た。

その顔は数年ぶりに会う知己への緊張と、こぼれ出しそうな期待に満ちている。先ほどの回想は天啓だったのだろう。

アオザキ。それはレフ・ウヴァルにとつて唯一の友人にして理解者の名前だ。

彼女は封印指定を受けて執行部に追われる身で、時計塔内部はおろかイギリスに足を運ぶ事さえ命に関わるためここ数年連絡さえとれなかった。特出した才能は時に身内にさえ敵を生むのだ。

そんな、もう二度と会う事はないと思っていた彼女が時計塔に戻ってきた。しかもこうして自分を訪ねに！

誤解なきよう注釈しておく、レフに恋愛感情はない。

彼は純粹に自分と類似した精神性と技術を持つ友人の来訪を喜び、彼女と一晚中語り明かせる可能性に胸を躍らせ、頬を高揚させているだけだ。恋愛感情なんてそんな贅沢なもの、理解できるだけの経験がない。

「失礼！ 数年ぶりだ、精度は落ちてないかいミス・アオザキ？

いや落ちていないだろうさ、君にそんな日がくるはずがない！ ようこそロクスロートへ、その理知的な眼鏡姿がまた見られて嬉しいよ！」

レフはノックもそぞろに館長室の扉を開ける。

毎日掃除されるだけで使われる事のない館長室には、凜とした姿勢で佇む、二十代前半の

女性がひとり。彼女は振り向きながら、トレードマークだった眼鏡を邪魔そうに外してレフに笑いかけた。

「ハイ、お邪魔してるわ館長サン。

いきなりだけど、路銀がきたんでお金貸してくれない？」

「って、妹の方じゃねえかつつつっ……！……！」

ガアン、と大人げなく椅子を蹴っ飛ばす四十代。

レフ・ウヴァルが見た夢は、昼寝の時間を迎えるまでもなく消え去った。



ミス・アオザキは旅慣れた服装だった。

簡素なシャツとくたびれたジーンズ。無造作に背中を下ろされた長い黒髪。

女らしさを引きだたせる化粧メイクはなし、飾り立てるしゃれっ気もなし。

なのにこの上なく魅力的な女性として映るのは、身にまとった清涼感と美しいプロポーションによるものだろう。

うっかり室内着で冒険に出してしまった戴冠前の王女さま。

はじめて彼女を見た時、レフはそんな印象を抱いたものだ。

それは十年たった今でも変わらない、時間の経過に左右されない所感だった。

「……失礼、ボクとした事がおとなげなく取り乱した。」

しかし、その眼鏡はなんだ。気持ちにはわかるが、姉の模倣とは感心しないな」

「ただの変装だけど？　ここじゃヘンに敵視されてるでしょ、私」

「そうか。君は自分を眼鏡ひとつで誤魔化せる風体だと思っていたのか。相変わらず自己評価がなっていない。姉の奥ゆかしさ、きめ細やかさを少しは見習いたまえ」

「真似ていいのか悪いのか、どっちなのよ」

ミス・アオザキは拗ねるように唇をどがらせる。

実の姉妹らしく、その仕草はレフが期待していた姉の方によく似ていた。

彼女たち姉妹は性格も生き方も真逆の間だが、肉体面においては類似する部分が多い。細かなパーツにわけて組み直せば、まったく同じ造形（じんたい）がもう一体ぐらいできる程度に。

「しかし、なんだってここに？　ボクが君を毛嫌いしているのは知っているだろう。ああ、路銀が尽きたという理由は信じるよ。君らしい計画性の無さだからね」

「お金の無心はついでなんだけどねー。うん、実は私も驚いてる。さっき受付で貴方が生きてるって聞いて、あれ、話が違うなって」

「？　ボクが生きていると話が違う？」

「そう。貴方、死んだんじゃないかったの？　手紙で報せてきたじゃない。近くまで来てたから

こうしてお悔やみに立ち寄ったのに、平気で生きてるんだもの」

ああ、またか、とレフは目眩を覚えた。

館長でありながらここ数年まるつきり外に出ていない事が、そんな噂話を生んでしまう。いっそ本当に研究室の虫になってしまえばどんなに気楽か、とレフは溜息をついた。

「よくある話さ、いちいち本気になるもんじゃない。だいたい、ボクが死んでいたら誰が君に手紙を送るんだ？」

「うん。まあ、そうよね」

ミス・アオザキは机の上に置かれたチェスの駒を手に取りながら、そんな返答をした。

「納得のいっていない顔だね。いいさ、じゃあ一応チェックしておこう。知らないうちに死んでいて亡霊になっていないとも限らない。そこに鏡があるだろ。どう？ ボクの姿は映っている？ ほら、幽霊本人には映っていなくても映っているように見えるんだろ？」

「あ、映ってる映ってる。っていうか間違いない生きてるし健康体よ貴方。私も安心した。ついでにとんだ無駄骨だって判明した」

「それは結構。君には嫌悪感しかないけど、君の姉君には同士として親愛の情がある。姉に免じて帰りのチケット代ぐらいは融通しよう。キャッシュでいいかい？」

「夕飯代ぐらいで結構よ。それより——今も続けているの、解読？」

ミス・アオザキの質問に、レフ・ウヴァルは何とも表現しようのないしこりを感じた。

もともと彼女はレフの研究に興味を示していなかった。

レフも彼女の在り方をまったく認めていなかった。

両者は初対面の時から分かり合えない関係だった。

なのに何故、今になってそんな質問をしてくるのか。

「たしか、過去を計測する研究、だったっけ？」

「そうだよ。君と違い、極めて一般的な考古学だ。」

残された遺物を探り、調べ、現代の常識に翻訳する。多くの物証を集め、こうだったに違いないという仮説を、反論の余地がない水準にまで組み上げる。

考古学は過去からのメッセージを正確に復元し、蘇らせる学問だ。星の観測と同じだよ。宇宙の広さを観る時、君たちは過去からの光で距離を測るんだろう？」

「逆だけだね。現在を知るための手段が、何億光年離れた光を観るコトしかないだけ。今の技術じゃ、昔あったもの”を頼りにする方が確実だから」

「ああ、それでいいんだ。人間は未来はおろか現在いまを知る事さえできない。確かなものは過去だけだ。過去からの記録を受信する事で、ボクたちは”今いまがどうしてここにあるのか”を立証し、変革できる。未来なんてものは君、テストの解答欄みたいなものだ。誰かに埋められるのを待つだけの空白だよ。重要なのはそれを埋める人間であって、空白みらい自体には何の価値



もない」

レフ・ウヴァルの人生は、その空白を埋めるためのものだ。

過去からの警告を正しく受け止め、この時代に流布させる。

過去にあった世界を、定理を再び現代に復刻させる。

それがレフの研究だ。生まれた時から確信していた、それが正しいのか間違っているのかという疑問すら浮かばない天命だ。

「ボクの研究は変わらなく続いている。確かにあった過去を記録し、残す事がボクの人生だ。この後——二十二世紀以降の未来なんて、ボクにはどうでもいい考察だ。

だってそんなもの、ボクには何の関係もない」

「あー、そっか。思い出した。だから貴方と仲が悪かったんだっけ。

私、過去より未来派だし。過去の人類史とか、だるま落としみたいに百年単位ですつ飛ばしても行き先は似たようなものだとか言っちゃったし」

「そうだよ。君は未来しか見ていない天然だ。新しいものの好きの魔術師にはたいそう人気があるのだからけど、ボクにとって疫病神そのものだ。未来のために自分の時間を使うなんて、考えたくもない」

「地面を積み上げていたら太陽に届いたのと、

太陽を得るために地面を積み上げた、の違いね。

でもまあ、どっちも野蛮である事に変わりはないんじゃない？」

「真理を知る事が野蛮だって？」

「知らなかったもの、見えなかったものを暴くって言うんだから、そりゃ野蛮でしよう」

一理ある。研究者が頑丈<sup>タフ</sup>なのは実験には辛抱強さが求められるからではなく、その性根が頑強だからだ。

彼等は決して「自分の都合」を諦めない。その暴力性は征服者に似ている。

「……ふん。ならボクは研究者失格だな。だってボクは違う。繊細だし、タフでもない。未来を考える余裕もない。自分の都合なんて考えた事さえない。ただ、こうしないと生きていけないだけなんだから」

それは自らの欠点を認めた言葉だった。

なのにレフの口元は微笑んでいる。

自嘲ではなく、人間的ではない自らの在り方に安心しきった綻<sup>ほころ</sup>びだった。

そんなレフの顔を、彼女は呆然と見つめていた。

「というより、それが楽しくて仕方がないって顔ね。」

たしかに貴方は私とは正反対で研究方針もどうかと思うけど、そんな顔で言われたら文句のつけようがないわ。ヘンな手紙がきたから心配して来ちゃったけど、取り越し苦労だったみたいね」

ミス・アオザキは指で弄<sup>もてあそ</sup>んでいたチェスの駒を机に戻すと、学長室を後にしようと歩き出

した。

「なんだ、気持ち悪いな。そんな顔ってどんな顔だ？」

「いま私がしてるような顔。」

ほんと、言ってる事と思ってる事が別々なんだから。その様子なら生きてるかぎり現役でしょ。貴方、研究が終わるまで死にそうにないし」

「そうかな。まあ、そうかもしれないな。生きているかぎり現役って言葉はいい。救いがあるうん、もしそうならいつか花でも手向けに来てくれ。ランチの貸しはそれで帳消しだ」

レフは肩をすくめながら、退室する彼女の横に並んで食堂へ歩き出すと、

「でも次に来るのならちゃんとフルネームを名乗ってくれよ。来客が妹の方だとわかっていたのなら、言われなくてもお茶ぐらいはご馳走していただと思うからね」

そんな、起こりえない未来を口にした。

### 03 秋 ロンドン 郊外 時計塔十一番街にて

淡い正午の陽差しに目を細めながら懐かしい街並を歩く。

私は派手めのサングラスに長髪のウィッグをつけて、ラフな格好で目的地を目指していた。上着は車の中に置いてきてしまったのでシャツ一枚の上半身がやや肌寒い。

もう少し時間が経てば陽射しも強まりちょうどいい案配になるのだが、あいにく、自由に使える時間は午前中だけだった。

ロクスロートカレッジを訪れたのはこれで二回目。これから会いに行く人物、向かうべき屋敷も前回と変わらない。

あの時は仲睦まじく談話したものだが、今回はそうはいかない。花を手向けて終わりになるだろう。

「遅れちゃったけど仕方ないわよね。っていうか、これでも早い方なのよね。脱走者が監獄に戻って来るようなものなんだから」

彼が死んだと報されたのは数ヶ月前で、その頃、私は時計塔からの追っ手を煙に巻いている最中だった。

追っ手が私を見失ったのを確認し、海路でこっそりイギリスに上陸し、たまたま出会ってしまったコブラを言い値で買い取ってロクスロートまでハイウェイを爆走して今にいたる。ちなみに、日本と違って高速料金を取られないのがたまらなく嬉しい。

私が時計塔に追われる理由は、彼等に嫌われているから……という訳ではない。むしろ好かれすぎてしまったから追いかけている。

破格の待遇で迎える、時計塔に残れば何不自由のない生活を約束する、なんて言われても、一つの街に囲われる時点で自由がないのだし、そもそも信用できないし。

そんなワケで時計塔内に多くの友人を残したまま根無し草になっていた私は数年ぶりにこの街に戻ってきた。

なんだかんだと言ってカレッジの空気はたいへん好ましい。

特に十一番街、ロクスロートの空気は格別だ。人生にイフがあるとしたら、私はこの街を本拠地にしていたかもしれないぐらいに。

「ロードがいなくなってくればここも住みやすいんだけど、無理な話か。千年近く時計塔を牛耳ってるって下手な吸血鬼よりしぶといと思う。あ、でもエルメロイは没落したんだっけ。鉱石学科のトップが変わったって話だし」

魔術協会の始まりは二世紀頃だが、この街ができあがったのは十二世紀頃だと聞いている。街を作る土地と資金を提供し、今も運営費を出しているのが十二の魔術名門、君主ロードと呼ばれる者たちだ。彼等こそ現代の神秘を管理し、秘匿し、衰退させている魔術世界の支配者と言ってもいい。

便宜上、彼等の上に協会創始者である学園長が存在するが、この学園長も時計塔の中心部に引きこもって幾星霜、滅多に姿を見せていない。

魔術協会は大きく三つの学院に分かれている。

ここロンドンの時計塔、北大西洋の移動学院・彷徨海ほうこうかい、エジプトのアトラス山。

どれも学院の規模的には同程度だが、現在、魔術協会と言えば時計塔そのものを指す事が多い。

神代の魔術こそ至高、西暦以後の魔術なぞ<sup>じぎ</sup>児童に等しい、と時計塔とは冷戦状態にある彷徨海。

そもそも外部とは没交渉、光さえ抜け出せないという、生きた奈落、巨人の穴蔵アトラス院。

この二つに所属するという事は時代に置いていかれるという事だ。

誰も好きこのんで過去の遺物になろうとは思わない。結果、西欧圏の魔術師たちの九割が時計塔に籍を置いた。

この勢力差はもう何があっても覆らない。時計塔が魔術世界の中心から落ちる事があるとするれば、それは即ち、この星における魔術世界の終焉を意味するだろう。

そんな時計塔も、ここ数世紀はロードたちの理念の違いで二つの勢力に分かれ、内紛一歩手前だと言う。

「ま、頭が変わるだけなら文句はないんだけど。なんだかんだ言って、ここ、研究者にとって理想的な環境だし」

アナクロな彷徨海に比べれば、ここは新しい学説に満ちている。私にとっては今も浪漫と神秘の詰まった玉手箱だ。

一概に魔術協会と言っても印象は人それぞれ。

協会に属していないフリーランスから見れば内部闘争にあけくれる権威集団であり、将来を夢見る魔術師の卵から見れば研究と栄達を叶える憧れの学問都市であり、研究に明け暮れる古参から見れば施設を共有できて助かる程度の、ありきたりな日常だ。

「おっと、ここだったここだった。ミスター・フラウロスの研究棟。相変わらず手入れの行き届いたいい庭ね……って、あれ？ 手入れが行き届いている……？」

つまり、住んでいる人間がいる……？

門には「来客は月末までお断り」の立て札。

屋敷は高い鉄柵で囲まれている。

私は手にした鞆を鉄柵の向こうに放り投げて、華麗なステップで屋敷の中庭へ降り立った。

## 04 ライノール・グシオンの記録

——魔術師の一生とは、未来に責務を果たす事だ。

涼やかな午前の研究室。

ライノール・グシオンは今日も今日とて思うがままに時間を消費し、勝利の口笛を吹きながら帰ってきた。

ノートPCを乗せた机と、ビールのつまった冷蔵庫と、ベッド替わりに使っている大型のソファ。部屋にあるのはそれだけ。そのシンプルさは研究室というより生活感のないモデルルームを思わせる。

ライノールはこの屋敷に籍を置く研究者だ。

男性。ドイツ国籍。アリア系。細身ではあるが背高で、その仕草はどこどころ荒っぽい。

野性的な表情や言動から、彼を研究棟の用心棒だと間違える者もいる。

それも無理からぬ事で、ライノールはとにかく好戦的で行動的な魔術師だった。

西に新しい魔術理論が考案されたと聞けば駆けつけ、この発案者に勝負を挑む。

東に新しい地脈変動があったと聞けば駆けつけ、その使用权を賭けて戦いを仕掛ける。

“おまえたちにその資源は勿体ない。”

その一言で人の成果物をかすめ取るコトから、時計塔では利権マフィアだの拝金魔術師だのとそしりを受けている。

それらはまったくの誤解でライノールの本命は別のところにあるのだが、そこは余人には



理解されづらかった。

実際の話、なぜ他人の儲け話をぶっ潰し、これを合法的に自分のものにするのがこんなに楽しいのか、ライノール自身にも説明できない。きつと死んでも分からないだろう、なんて確信さえある。

「つーか、未来があればそれでいいんだつーの。伝統保護だの現状維持だのトロくてやっつけられねえ。金なんてものは未来に対してベッドするもんだらうに」

悪態をつきながら冷蔵庫を開け、ビール瓶に手を伸ばし、一口で旨そうに飲み干す。

一夜かけての荒事の報酬にしてはささやかなものだが、彼にはこれで十分な消費だった。彼にとつて「現在」にかけるコストは安ければ安いほどいい。

金にがめつく、外にバラまく出費は多く、しかし自身に向ける金額はほとんど無し。大成した魔術師はほとんどが奇人というが、ライノール・グシオンもそのひとりだ。

彼は勤勉な魔術師であるにも関わらず、その私生活は無軌道な青年そのものだった。

無頼漢ぶらいかんと煙けむたがられるのにもべなるかな、おかげでビジネスパートナーは多いものの友人はひとりもない。

「いや、いらねえし。ポッチじゃねえし。そもそも友人として付き合いたい人間なんざひとり

殺風景な部屋で、いや、いたな、とライノールは訂正した。

彼のライフワークに興味を持ち、理解を示した数奇者はひとりいた。

極東の島国の魔術師。

人間の悪性にダメ出しをしては、心の底では信じきっていたお人好し。

鞆ひとつで協会にケンカを売り、流星のように輝く髪をなびかせながら、この星で一番の強がりをお口にした女が、彼の記憶には確かにいたのだ。

「つーかあの女、体付きからしてズルい。あれで処女だったらマジ笑うわ。なんでエクスレイテッドしなかったんだって抗議するね、オレなら」

悪態をつくライノールの口元はニヤけている。使命感に突き動かされるライノールにとっては滅多にない、良いメモリーだったのだろう。

『お帰りなさいませ館長。今朝も朝帰りご苦労さまです。』

早速ですが、鉱石科から請求書と謝罪要求が届いています。先日、館長が損壊させた発掘施設について説明を求めると、

研究室に取り付けられたスピーカーから、瑞々しい女性の声が響く。  
声はライノールの秘書兼世話役のものだ。

「マジかよ。裏口からこっそり帰ってきたのになんでわかるんだよテメエ。あれか、監視カメラあんのか、こっこ？」

『その冷蔵庫が開くと私の机にあるランプが光る仕組みですが、なにか』

そりゃ気が利いてる、と吐き捨てて、ライノールはソファーに背中から倒れこんだ。

「クレーム対応はテメエの仕事だろうが。なんのための秘書だって話だよ。いいか、オレは寝る。今日こそ寝る。かれこれ一週間……いや、二週間？ いやまて、三週間か？ ともかくやる事が多すぎて満足に眠ってないんだ。奇跡的に二時間の空きができたんだから、今ぐらいい夢の世界に旅立たせてくれ」

『はあ。ですが、今回ばかりは先方も本気でお怒りかと。交渉は私が行うとしても、せめて顔ぐらいい出しておいた方がよろしいのでは？ 精一杯の誠意として』

「さらったガキどもを労働力にしてやがった連中に見せる誠意なんてねえよ。

いい、いつものアレでいっとけよ。ぜんぶ秘書がやったコトです、で返しておけば丸く収まるんだろ？」

『なるほど、今回も初耳です。』

ではその方向で対処します。私の一存という事なら、館長が横取り……いえ、獲得された礼装は私の管理下におかれますが、よろしいですか？』

「いい、いい。必要なものはもう送った。残り物はテメエにくれてやる。じゃあオレは寝るかな。いつもの時間に起きるんで、そのタイミングで茶を置いておいてくれ。お得意の地獄

じみたパイも一緒にな」

『かしまりました。天国のように甘いパイですね』

スピーカーからの声が途切れる。

ライノールはさも面倒そうに息を吐き、目を閉じた。

宇宙にいるような無重力状態。あるいは重力の淵に落ちるジェットコースター。

どちらも同じようなものだが、そこまでの疲労感がありながら、彼の意識ははまだ覚めたままだった。

「……呆れるぜ。満足に眠れもしねえ。

魔術師の一生は長すぎるな。やるべき事が多すぎて眠っている暇もねえ。死ぬまで馬車馬のように働くしかねえのかよ、クソ」

ライノールは観念してソファァーから跳ね起きると、次の仕事に備えて机に座った。

カタカタと軽快に響くキーボード音。

机にはノートPCが一台あり、ディスプレイには更新されたばかりの新人生たちの成績が<sup>スコア</sup>一覧されていた。その中で見込みのある新人を見つけ、経歴と現状を調べ、援助する価値があるのかを検分するのが彼の日課だ。

時計塔において、資金がないだけで才能を無駄にする魔術師はごまんという。

それが新参なら尚更で彼等はつねにパトロンを求めている。

ライノールはそういった新入生たちに課題と称して、解くべき問題と、そのために必要な経費を与えていた。

ようは手当たり次第に自分の研究課題をバラまき、間接的に後任を育てているのだ。

家庭や弟子に恵まれなかったライノールは社会の中に情報<sup>ミ</sup>遺伝<sup>ム</sup>を放つ事で、自らの後継を残す選択をしたのだろう。

昔から魔術、魔道の追究には金がかかるもので、富を持つ者でなければ魔術師の門すらくぐれなかったが、二十世紀初頭、その問題は多少なり緩和された。十二番目の学科として現代魔術が承認されたからだ。

現代魔術はここ百年に起きた魔術をまとめ、広く浅く、より一般的な魔術として、<sup>レ</sup>使いやす<sup>い</sup>ものであること<sup>を</sup>を目的とした学部だ。

ロードたちの後ろ盾も承認もいらず、自由に魔術を語り合い、評価しあい、時には画像などもアップする、まさに現代社会に適応した新世代<sup>ニューエイジ</sup>たちのフィールドである。

“時計塔の門は五世代を重ねた家系にしか開かれない”とされていた暗黙の了解は現代魔術科の成立によって崩された。

かくして今まで野でくすぶっていた多くの新参が時計塔の門をたたき、魔術学院都市は全盛期の賑わいを取り戻した。

ニューエイジ  
新世代最大の出世頭と言われるエルメロイ二世が現代魔術の学部長に納まったのも時流というものだろう。

とは言っても、<sup>あつれき</sup>“遡ってもたかだか一世紀程度”の新世代と“十世紀以上の歴史を持つ”名門魔術師たちの軋轢がどれほどのものかは言うまでもない。

新世代はあくまで労働力であり、時計塔の経済を回すための働き蟻にすぎない……というのがロードたちの見解だ。

ライノールもそこは承知している。だが才能に貴賤はない。魔術師にとって優先すべきは家柄ではなく命題だ。

自らが生まれた義務。

自らが作られた意味を果たす。

そのために時計塔は、そのために魔術師は存在する。

歴史がどうだの血管がどうだの、そんな過去の話で時間を無駄にする事自体、魔術の始祖への冒瀆だとライノール・グシオンは感じている。

「後任を育てるのが魔術師の義務だ。自分の研究なんて二十五年で十分なんだよ。なにしろそれが才能のピークだ。あとは使うだけ無駄だったの。人間、折り返しになったら未来に投げ<sup>じんせい</sup>る時間に切りかえなくちゃな」

ライノールが未来を優先するようになったのは、彼が歳を取ったからではない。

彼は物心ついた時から未来を観測する事だけをタスクとしていた。

過去は土壌にすぎない。現在は仮初の夢にすぎない。魔術師はただ未来を目指さなくてはならない。

“そんなオレが考古学科に居座っているとはお笑いだ。過去の遺物になんざこれっぽっちも興味もない、むしろ消えてほしいぐらいのにな。でもしょうがないだろう、あそこにある計測器がいちばん安く使えるんだから！”

いつしかそれがライノールの口癖になっていた。しかし。

“……それは違うと思うけど。貴方が過去を嫌うのは、事実を知る事で変わってしまうものがある。と知っているから。”

貴方が未来を大切に想うのは、それが自分の手では変えられないものだからでしょ？ ほーんと、男って無駄にロマンチストなんだから”

「先ほどの記憶の影響だろう。」

ライノールはまたも口元を緩ませて、新しい投資先をノリで決定し、挨拶のメールを送信する。

『足長おじさんの真似事をして中、失礼します館長。今よろしいでしょうか？』

「よろしくねえよ、正午まで起こすなって言わなかったか!? それにしても帰ってくるの早いな!」

『タクシー代も経費で落ちましたので。』

ところで、先ほどからロビーにお客様を待たせています。館長に似つかわしいハレンチな格好のご婦人なので、いつものように資材置き場で待ってもらいますか?』

「女の客だあ? 覚えはねえがどっかで約束したんだろ。起きたら相手をするから、適当な空き部屋に放りこんどけ。最悪、寝過ごしても日が落ちる頃には目を覚ますからな」

『了解、まったくもっていつものパターンですね。』

念のために確認をしただけです。では——』

「……ちよつと待て。こつちも念のために訊いておく。前にパンツ一丁の女にも無反応だったテメエがハレンチとまで言いきる格好ってなんだ? まさかヌーティストってワケでもあるまい。名前は?」

『それがなんとも。この名詞、なんて読むんでしょう。日本語は難しいですね』

「日本語と分かっている時点で読めてるじゃねえか。なにもつたいぶってんだよテメエ」

『憶測ですが、ミス・アオザキ、と読めない事ありません』

「——今すぐ館長室に通してくれ。それがすんだらテメエは火星にでも行っている、いいか、せめて半日は戻ってくるんじゃないやねえぞ!」



ライノールは慌ただしく椅子から立ちあがり、隣室に駆けこんだ。

徹夜明けでゾンビじみた顔を冷水で洗い流し、髪を整え、記憶を頼りに彼女の趣味に合ったシャツを羽織る。

ほんの一瞬、いっそ外に出て上下一式を見繕<sup>みつろ</sup>ってくるプランも考えたが、その三十分で彼女はあっさり消えてしまうかもしれない、と思い直した。なにしろフワフワと蝶のように自由な女だ。

結果として冴えない姿のまま廊下を走るコトになった。

その顔は数年ぶりに会う知己への緊張と、こぼれ出しそうな期待に満ちている。

先ほどの記憶は天啓だったのだろう。

ミス・アオザキ。それはライノール・グシオンにとって唯一の同士の名前だった。

彼女は極めてレアな魔術師で、どの組織にも属していないが、どの組織にも煙たがられている自由人だ。

犯罪者として指名手配されているワケではないが、彼女を仕留めて名を上げようとする者は少なくない。

事実、彼女が時計塔に訪れた時、何事もなく平穩に帰れたためしがない。

「一度とこんなシケた街には寄りつかないから」

そうタンカをきって封印指定執行部を損壊させてからはや数年。もう会う事はないと思っていた彼女が時計塔に戻ってきた。しかもこうして自分を訪ねに！

誤解なきよう注釈しておく、ライノールに恋愛感情はない。

あるのは純然たる情欲というか、今度こそあの女を落としてみせるというやる気だけである。そもそも恋愛感情なんて、そんな人間らしいものを取得する容量、彼はとつくに使いきっていた。

「よう！ 数年ぶりだ、変わらずロックでいるかミス・アオザキ！ いや、見なくてもわかる、前より一段とロックになってるに決まってる！ ともあれようこそロクスロートへ！ オレを訊ねに来たってコトはこれがラストチャンスだと自惚れていいのかい!?」

ライノールはノックもなしで館長室の扉を開けた。

毎日掃除されるだけで使われる事のない館長室には、凜とした姿勢で佇む、二十代前半の女性がひとり。

彼女は振り向きながら顔にかぶせた長いウィッグを外してライノールに笑いかけた。

「こんにちは、お久しぶり背高せいたかさん。

いまさらだけど館長就任おめでとう。

それといきなりなんだけど、路銀がつかたんでお金を貸してくれないかしら？」

「って、姉貴の方じゃねえかクソがあー!!!」

ガアン、と年甲斐もなく椅子を蹴つ飛ばす四十代。ライノール・グシオンが夢見たラストチャンスは、夜の帳とぼりを迎えるまでもなく消え去った。



ミス・アオザキはティーンエイジャーのような服装だった。

黒い無地のロングティーマットにレザーのパンツ。

また妙なモノに使ったのか、ブラウンのかかった黒髪はショートカットに戻っている。

ライノールが以前に出会った時から数年経っているが、髪の高さを除けば彼女の容姿は一つ変わっていない。しいて言えばかけている眼鏡のデザインが、少しだけ柔らかくなったぐらいだろうか。

メイクは最小限に抑えられているクセに、匂い立つような色香がある。

時計塔時代からミス・アオザキはそういう女性だった。

研究の虫に見えて身だしなみに気を遣い、女性としての自分を楽しんでいる。それが彼女の軽やかさ、華やかさの正体だろう。

舞うだけで周囲の視線を集めてしまう優雅な蝶のようだ、とライノールはかつての所感を思い出す。

それは十年たった今でも変わらない、懐かしい記憶だった。

「いや、待って待って待って。学生時代より若々しくねえかオタク？ その風体はなんだよ。九十年

代のヒッピーじゃあるまいし、自由すぎねえか？」

「ええ、完璧な変装でしょ？　ここじゃ指名手配されてるんだから、これぐらい有り得ない格好をしないとね」

「……あれか。二十歳過ぎても学生服で接待する店ってヤツか。日本はほんとハイギューグの巢窟だな。ああ眼鏡は取るなよ、そのままがいい。疲れてるんだ、せめて言葉遣いだけでも淑女らしくあってくれ」

「あら。貴方から見たら、私の中身は淑女らしくないってコト？」

「どの社交界にスカートの下から列車砲召喚してぶっ放す淑女がいるんだよ。オタク、やり口が吸血鬼じみてきてないか？　妹を見習え妹を。ケンカを売るにしても徒手空拳ステゴロで後腐れもねえしな。少しは人間らしくしろってんだ」

「むー。アレと比べたら私はぜんぜん常識内なんですけどー」

ミス・アオザキは拗ねるように唇をどがらせる。

実の姉妹らしく、その仕草はライノールが期待していた妹の方によく似ていた。

彼女たち姉妹は真逆の生き方を選択したが、根底にある人間性はそう離れてはいない。

環状線の線路のようなもので、今はそれぞれ正反対の位置にいるが、そもその出発点は同じであり、行き着くところも同じなのだろう。

「で、真剣な話、なに企んでやがる？」

オタクとオレは反りが合わない事ぐらい知ってるよな？ アレか？ 暇潰しにサプライズパーティーでもしこんでオレの心臓を止めに来たのか？ 目的はオレの貯金か？」

「そうね。思わぬ出物があつたからついお財布の紐がゆるんじやって、一文無しなのは本当よ。でも、驚かされたのはこっちの方なだけけど。」

君、なんだって生きてるの？ 殺されたっていうから何とかしてお花を添えにきたのに、話が違わない？」

「なんだそりゃ。オレが死んだって、いつ？」

「半年ぐらい前。後はよろしくって、手紙、送ってきたでしょう？」

「そりゃあ何かの間違いだ。仮にそうだったとしても、なんでオタクに助けを乞うんだよ、オレが。だいたい、いまわの際の言葉なんて最高の飛び道具があるなら妹の方に撃ってるつーの。オタクに遺言を残したところでゾンビになるか人形の材料になるかどっちかじゃねえか」

「——まあ、そうよね。」

ところで半年前、このあたりで消えた人間がいるとか、そういう話は聞いてない？」

「いや、ないね。こんなシケた街でもロクスロットはオレの庭だ。何が増えて何が消えたかは把握している。姿をくらましたヤツはいるが、殺人事件は一件もねえよ」

「ふーん。殺人はゼロ件ね」

ミス・アオザキは冷めきつた目で机の上に置かれたチェスの駒を手に取りながら、そんな

返答をした。

「妙な話だったが、用件はこれで終わりだな。無駄足ご苦労さん。オタクはまったく好みじゃないが、オレの身を案じて来たんだ、交通費ぐらいは出してやるよ。それともしばらく泊まっただけか？」

「それはどうもご親切に。でも結構よ、宿泊先ならアテがあるし。貸してほしいのは隠れ家までのガソリン代だけだから。

それより——今も続けているの、研究？」

ミス・アオザキの質問に、ライノール・グシオンはなんとも表現し辛い、妙なざらつきを感じた。

彼女はライノールの研究に否定的で、口論したところで得るものは反感だけと理解している筈だ。

なのに何故、今になってそんな質問をしてくるのか。

「たしか未来を計測する研究、だったでしょ？」

未来は予測するものだけど、貴方はちょっと考えが違ったわよね」

「ああ。確かに未来予測はするが、それは座標のアタリをつけているだけだ。

オレは未来が必要とするモノを残す。それが物資であろうと情報であろうと、先にいる人間が求めるものをな。なにしろ予測される未来凶だと、あっちは何もかも不足している。環境保護なんて方法じゃとても間に合わない。より積極的に、あっちに送り届けるぐらいの気概じゃなくっちゃな」

ライノール・グシオンは希少とされる虚数属性を持つ魔術師だ。

簡単かつ乱暴に言えば、次元の隙間に手を突っ込めるダイバーである。

無いがあるとされる虚数空間は次元ポケットのようなもので、中に落ちたものは空間にも時間にもとらわれないモノになる。

彼はその特性をタイムカプセルとして利用した。

未来に自分と同じ虚数の使い手があると測定し、未来において失われているもの、未来において必要とされるであろうものを保存し続けている。

「送信しかできないけど、それも時間旅行の一つでしょうね。

過去は受信することで、未来は送信することで干渉できる、だっけ。

でもタイムパラドックスとか考えない？　そもそも貴方がこの時代から隔離しちゃったモノがあるから未来では失われたんだ、とか」

「知ったコトかよ。それでこの時代が終わって人類史に空白ができるのなら胸がスツとすぜ。オレ程度の努力じゃそんな大それたコトはできねえがな。

安心しろ、送っているのは基本的な情報だ。オレは人間に消費される資源を送っているん

じゃない。文明によって消費される、時代が変わるごとに塗りつぶされる「事実」ってヤツを送っているだけだ」

「ふうん。なんのために？」

「決まっているだろう。それで、何かが変わるかもしれないからだ」

苦虫を噛みつぶしたような顔で彼は言った。

何か、なんて抽象的に言葉を使っておきながら、未来に待つ結末を知っているかのように。当然だ。彼は知っている。未来がどのような世界かを知っている。

ライノール・グシオンの人生は、その痛烈な世界に報いるためのものだ。

未来を計測し、過去と現在を犠牲にしてまで魔術を繁栄させる。

それがライノールの存在意義だ。

生まれた時から確信していた、それが正しいのか間違っているのかという疑問すら浮かばない天命だ。

「いいからほっとけ。どうせ他人事だろうが。オレは後に続くものが見たいだけだ。今にも過去にも興味はない。おっと、以前のよう<sup>が</sup>に人類が今までなにをしてきたのか、どこから来たのかなんて高説ぶらないでくれよ。そんなもの、オレにとっちゃ一銭の価値もない」

「ああ。そんなコトもあったわね。未来なんて歴史が積み重ねたエピソードなんだから、あんまり期待しすぎるなって言ったんだっけ、私」



「ああ。その後は大ゲンカだったな。」

フルコースのデザートみたいなものでしょ？　なんてサラリと言いやがって。人が真剣にとりくんでる事業をバカにされたら頭にもくる。

オタクは過去に重きを置く天才だ。古くさい魔術師どもにとっちゃビーナスみたいなものだろうが、オレにとっちゃ異教の女神だ。話せば話すほど排除したくてたまらなくなる。なんで、そうなる前に出て行ってくれ」

「？　異教の女神を排除するって、どこかの宗教じゃあるまいし。なんでそうなるの？」  
「そりゃあ、うっかりハマって宗旨変えしたくなったらまずいからだろ。」

四十年近く馬鹿やってきたんだ。今さら真人間になっちまったら、それこそホントに馬鹿みたいじゃねえか」

それは自らのいびつさを認めた言葉だった。

なのにライノールの口元は微笑んでいる。もしそうであったのなら、それはそれで楽しいだろうと仮定する、人間らしい綻びほころびだった。

「貴方は昔から、ずっと真人間だったけどね。」

うん、そういうコトなら退散しましょう。貴方がやっている事はうちのバカと同じぐらい無謀な事だけど、そんな顔をされたら止める気も失せちゃった。手紙の件は忘れていいよ。あとはこっちで対処しておくから」

指で弄もてあそんでいたチェスの駒を机に戻し、ミス・アオザキは学長室を後にしようとして歩き出し

た。

「おい、待てよ。ガソリン代を忘れてるぜ。ほら、もってけ。スタンドはジェニファアの店にしとけ。サーブスいいからな」

予想外のアドバイスに、彼女は足を止めてライノールに振り向いた。

きよとん、という擬音が似合う、十代の少女のような表情で。

「それどこ？ ロクスロットにスタンドなんてあったっけ？」

オレンジ色の魔術師はポケットから携帯端末を取り出してロクスロットの地図を表示する。

「おまえ、スマホ使うのか!？」

「使うわよ？ ちょっと前までガラケーだったけど、こっちの方が多機能だから機種変えしたんだけど……おかしい？」

「だって必要ないだろ、おまえレベルだと。スマホでできる事なんざ頭ん中で出来るじゃねえか」

計算にしろ通信にしろ、携帯端末で出来る程度の処理は魔術回路で行える。

文明ははまだ神秘を駆逐する域に達していない。

テクノロジは人間から多くの義務を肩代わりしたが、この程度ではまだ足りない。せめて人間そのものが不要になる域でなければ、魔術が追い越される事はない。

なので高位の魔術師ほど電子機器を軽視、ないし軽蔑している。そういったものに頼るの

は未熟者だと公言しているようなものだからだ。

しかし。

「外付けの端末で用が足りるのなら、その分の回路を違う用途に回せるでしょう？」

今までであった機能を捨てる代わりに新しい能力じかんを獲得する。未来にリソースを残すってこういう事だと思っけど？」

「——ほら。だから憎らしいんだよ、アンタは」

ライノール・グシオンは記憶する。

過去の価値を知りながら躊躇なく現代を優先する長所こそが、この姉妹の共通点だど。

「じゃ、さよなら。あの手紙じゃないけど、ホントに殺されないう気をつけて」

ライノールは尻ポケットから1ポンド紙幣の束を取り出し、数えもせず彼女に投げつけて、

「そんなドジはしねえよ。オレはオレの時間を好きなように使う。

……だがまあ、何処で恨みを買っているか分からないのが人生だ。もし返り討ちにあつち  
まったら、その時こそ笑い飛ばしに来てくれればいい。人の生き甲斐をデザート扱いたア  
ンタだ。それぐらい、ジョークまじりにこなしてくれるだろ？」

そんな、過ぎ去った過去を口にした。

## 05 冬ある魔術師の死

今にも雪が降り出しそうな灰色の空。

鉄柵に囲まれた小さな墓地で、ささやかに葬式は執り行われた。

霊園は人々の生活圏から目に付かないよう高台に作られていた。

二十人はいた葬列者は故人の思い出話を交わしながら墓地を後にしていく。

見渡すかぎりの荒れ野。

均等に配置された死者の銘柄<sup>いし</sup>。

今日は風の音もない。

街から届く正午の鐘だけが、街と故人を結ぶ記録だった。

「ホントに花を手向けに来るコトになるなんてね。

しかも、死んでも会いたくないヤツと鉢合わせだし」

「迷惑なのはこっちの方だ。笑い飛ばしてほしいと言われたのに、おまえがいては引きつり笑  
いさえ浮かばない」

街に住んでいる参列者たちが去ったあと。

示し合わしたように物陰から現れたのは、二人の日本人女性だった。



「こうならないよう私なりにあの屋敷を見張っていたけど、まさか中で自殺しちゃうなんてね。そっちはこうなるコト、わかってた?」

「まあな。そっちにもミスター・フラウロスからの手紙が届いたんだらう?」

「私は既に命を断った。私は殺されるだらうから、後処理に来てほしい。」

「どんな魔術だか知らないが、よく私の元に届いたもんだ。そこに感心して足を運んだところ、当人が生きていたのには驚いたがね」

「あー、そっか。フラウロスさんは私と姉貴のラストネームしか覚えていなかったんだ。だから私たち二人に届いた、と。」

「でも、どうしてそんなコトに? そもそもこのレフ・ウヴァルとかライノール・グシオンって誰よ? そんなヤツ、私会ったコトもないんですけど」

「会ってたよ。ミスター・フラウロスと初めて会った時、おまえもいただらう」

「うん、あそこのロブスター美味しかった」

「あの時から私とおまえは、彼にとつて同胞であり、無関心であり、憎むべき敵として覚えられたんだ。彼はそれを口にしなかったが、だからこそ最後の最後で私たちを指名したんだらうな。敵でありながら、最大の理解者として」

「む。……それって、もしかして二重人格ってヤツ？」

「ああ。それも一つの事柄を見て、同時に異なる処理をする完全な多重人格だ。

彼の中では自分たちの名前さえ別だったようだしね。ここに刻まれているレフ某ともライノール某とも私たちは話してははずだ。私たち自身、そうだと気付かないうちに」

「私は過去を解読していたミスターしか知らないけど？」

「私だって未来に奉仕していた彼しか知らない。だか彼の中ではそれぞれ個別の印象として記録されていたんだろうさ。一人のフラウロス氏は私を仲間と共感し、一人のフラウロス氏は私を敵だと感じていた」

「ああ、そうなんだ。どうりでたまに妙なコトを言うなって。

それにしても二重人格かあ……じゃあやっぱり、フラウロスさんを殺したのは別の人格のフラウロスさんってワケ？」

「現場に第三者がいらないんだからそうなるだろ。レフ某とライノール某が互いに殺意を抱いていたのは確かなんだから。

なにしろどちらも過去と未来の偏執狂だ。同じ研究棟で暮らしていれば目障りこの上ないし、なにより一方がいなくなればより多く“自分”に時間が回ってくる。殺さない理由がないだろ」

「でもそれって自分を殺すってコトじゃない。体の所有権を得るために体を亡くしちゃ本末転

倒よ。っていうか、そんな動機ならフラウロスさんは何十年も前に自殺してるでしょ」

「ああ。そうならなかったという事は、今までいい仲介役がいたからだろう。」

だがそれがいなくなってしまう、過去と未来は互いへの憎しみを止められなかった。……あるいは、その憎悪は自分自身に向けられたものだったかもしれない。

どうあれ死体は学長室にあったそうだから、どちらかがトラップをしかけたのは確かだろう。どちらと同じチャンスがあったから、どちらが先に仕掛けたのかはそれこそ運だな。ミスター・フラウロスは自分に向けて自分が作った罠にかかって自らを両断した。結末<sup>はなし</sup>としてはこんなところだ。文句のつけどころのない自滅だな」

「……そっか。本当にそうなら部外者である私たちが文句をつける筋合いはないけど。ん？でも手紙には『既に死んでいる』ってあったじゃない。あれは？」

「そっちは真正正銘の自殺だろう。」

この通り過去と未来は自滅したが、それはある人物が失われてしまったからだ。

私たちに手紙を送り、今まで二人をとりなしていた仲介者であり、一番はじめに『既に死んでいた』何者かは確かにいたんだ。

即ち、

「——そっか『現在』だ！ ようは三人目のフラウロスさんがいたってコトね！」

「そういうこと。なにしろ過去と未来に分かれた人格だろ。とくれば現在を担当する人格があるのは当然だ。」

はじめからそうだったのか、研究の過程でそうしたのかは不明だが、ミスター・フラウロスは過去・現在・未来のカテゴリで自分の人格を分けた。

過去は未来を無視し、未来は過去を否定していた。

そんな真逆の両者がうまくいつていたのは仲介する“現在”がいたからだ。

だが彼は自殺した。自らの人格を閉じて体を二人に明け渡した。それが過去と未来を殺す結末になると理解した上で、一番はじめに自らの命を断ったのさ。

……まあ、残った謎は“現在”氏がなぜ自殺できたのかという事だけだ。こればかりはどう考えても見当が付かない。おまえはどう思う？」

「……そうね。自殺だっていうなら、世をはかなんで、つてのが説得力あるかな。

現在のフラウロスさんは仲介という立場から、未来と過去の極点を知らざるをえなかったんでしょ？　ならそこにはもう希望なんかない。

過去と未来の二人はまだいいわ。だって一方の事しか見てないんだもの。でも現在は両方の結末を知ってしまった。それが変えられない絶望だと誰よりも理解してしまった。その重責に耐えきれずに自殺してしまっただけ……とか？」

「あのね、そんな動機じゃ無理だから。おまえは本当に基礎がなっていない。そもそも簡単に自殺できないだろ、魔術師は」

「あ。……そうでした。魔術刻印がある以上、精神的疾患で自分から命を断つ事は難しいわよ



ね」

「ああ。刻印は恩恵でもあるが、同時に運命を縛る鎖でもある。外的要因で命を落とすのならばともかく、自分の手で一族の掟を破る事はできない。つまり、挫折したから自ら命を断つ、なんてリタイヤは許されない。それが古い家柄なら尚更だ。おまえは知らないだろうからきちんと教えてやる。

西暦以前から続く家系が持つはじまりの命令。

魔術世界におけるもつとも崇高な血の掟。

一族が途絶えるまでその使命に殉じさせる、呪いじみた絶対厳守の誇り。

それが冠位指定——グランドオーダーと呼ばれるものだ。

ようはその魔術師の家系が起ころ際、神から授かった責務だな。フラウロス氏は間違いなくその手の名門の嫡子だった。だから、絶望程度で自分を殺せる訳がない」

「……………誇り。絶対厳守の誇り、か。

うん。それなら、まあ、説明はつくかも。そういう理由ならきつとアリだ」

「なに？ 分かったのか、おまえ？」

「……………まあ、あんまり納得できないけど、多分。

そのオーダーとやらの延長であれば説明がつくんでしょ？ なら答えは一つしかない。現在“のフラウロス氏は自殺したんじゃないなくて、過去と未来のフラウロス氏を止めるためにやむなく自刃した。

姉貴から見ても未来のフラウロス氏はやばかったんでしょ？ 過去のフラウロス氏もどっこいよ。この二人の研究は続けるだけでこの世界に害を呼びこむものだった。

だって、自分が見ている時間以外はいらなくなって考えだつたんだもの」

「……そうだな。フラウロスに刻まれたオーダーが破壊的なものではなかったとしても、それ以外を排斥しようとする考えそのものが危険だった。しかし、それが自殺とどう繋がる？」

「だから、現在のフラウロス氏も同じだったんじゃない？

彼のオーダーは現在強を守る調こと。そのために自分が向いている方向にしか興味を持たなかったレフ・ウヴァルとライノール・グシオンを止めなくてはいけなかった。

でもフラウロスという人間を殺す事ができない彼は、現在じぶんを閉ざす事で、いずれ来る間接的な自滅を呼びこんだ。たどえそれがオーダーに突き動かされたものだとしても、彼は彼なりに今の「時間」を守つたんじゃないのかな」

そうだ。それが現代の私の結論だ。

過去を殺したところで未来は喜ぶだけだ。

未来を閉ざしたところで過去は頑強になるだけだ。

私に天命を与えた何者かの思惑に添うだけだ。

だから今を守るためには、現在ワタシが消えねばならなかった。

その成果はあったのかどうか、誰も知る事はないとしても。

「……だとしたら皮肉な話だ。」

現在のフラウロス氏がそんな方法をとったのは、心のどこかで残った二人が和解するのを夢見てのものだろう。彼等が手を取り合っていれば、少なくともフラウロスという人間は生き続けたんだから」

「そうなの？ 私、ミスター・フラウロスはそこまで楽観主義者じゃなかった気がするけど。その根拠は？」

「……はあ。そのあたりは本当に鈍いなオマエ。そんなだから未だに恋人のひとりもできないんだ。ほら、後は頼む」と手紙にあっただろう？ そもそも彼が私たちを呼びつけたのはだな、現在に残してしまった二人にせめて——いや、いい。口にするのもバカバカしい。もし私たちが訪れる順番が逆だったら、なんてもしもを考えるのも面倒だ」

「ちよつと待って。今のは聞き捨てならない。」

できないんじゃないから。作らないだけだから。キープもちゃんといるんだからね！」

「はいはい、いつまでも諦めが悪くて結構結構。考察はこれで終わりだ。故人の弔いには十分だろうからな。さて、私は街に戻るがおまえは？ どうせ素寒貧なんだろ。たまには飯でも食べていくか？」

「ワオ。それ、姉貴のおごり？」

「ああ。特別に、ツケのきく店を紹介してやろうじゃないか」

ニヤリと愉快そうに口元を歪ませて、髪の高いミス・アオザキはフラウロスの墓に背を向けた。

長髪のミス・アオザキは手にした花を墓前に備えて、丘を下り始めた彼女の後を追いかける。

これが2014年の、現在のワタシが見た最後の光景だ。

この断片が何らかの意味を持つ日が来るのかどうかは、2015年を失ったワタシにはあずかり知らぬ事である。